

「疎開と東京大空襲」加藤静江氏

加藤さんは、昭和 9(1934)年、東京市本所区豎川に生まれ、昭和 16(1941)年、小学校が国民学校と改称された年に入学されました。疎開と東京大空襲の体験を中心に語っていただきました。

昭和 16(1941)年、太平洋戦争が始まる。戦況の悪化とともに空襲が激しくなり、4年生の2学期から疎開が始まった。私と姉は母の実家、千葉の津田沼に疎開した。授業は毎日モールス信号の訓練、音楽の時間は飛行機の音の聞き分け、運動会では竹やりでわら人形を突く競技があり、怖くて嫌でたまらなかった。あるとき、私と姉のすぐ脇を機銃掃射でびゅんびゅんと打ち込み飛び去っていき、とても怖い思いをした。4年生も終わりの頃の3月9日の真夜中、サイレンが鳴り、庭に飛び出した。10歳だった私は空一面キラキラ明るく照らして落ちてくる焼夷弾を綺麗とさえ感じ、東京にいる母と弟の身にどんなおそろしいことがおこっているか想像できなかった。東京大空襲だった。1か月後、母と弟の慰霊祭で錦糸町の駅を降りると死臭が漂い、見渡す限り焼け野原だった。この日の光景は忘れる琴ができない。今でも幼かった弟の姿を追うことがあり、私にとっての戦争はまだ続いている。悲惨な戦争は、二度と繰り返してはならない。

(講演の内容は、「資料館だより」から転載しました。)